

## 幸田露伴「御手製未来記」(『番茶會談』) 最終回の発見と

### 「実業学」の連鎖

―一九二一、一九二二年、『実業少年』掲載の露伴少年文学への視点―

吉田 大輔

#### はじめに

幸田露伴(一八六七―一九四七)の「御手製未来記」(一九二二年初出、のち一九一五年の単行本『立志立功』収録に際して「番茶會談」と改題)は、一八八九年から一九二二年にかけて、露伴が多く書いた啓蒙的な少年向け作品のひとつであり、独創的な力作と言える。この作品は、経済的にあまり豊かではない少年たちが集い、「読書會」や「番茶會」という互助的な会を組織していることから語り起こされる。「読書會」とは、少年同士で金を出し合い、本を共同購入し、勉強する会であり、「番茶會」とはその発展として行われる談話会である。菓子もなく番茶だけを飲みつつ行う会だが、「御馳走」の代わりに「知識の交換」が、「虚礼」の代わりに「熱心」がある会であると描かれる。この会で彼らのひとり、もしも身一つで世の中に立たなくてはいけなくなった場合、どのような商売をすればよいだろう、どのような「問題」がまだ解決されずに世の中に残っているのだろうか、と問う。別の少年が、そうした「問題」を豊富に提示してくれる「妙な人」と知り合ったので、みんなでその人のところへ行き聞いてみよう、と応じる。露伴本人を連想させる「妙な人」と少年たちは、こうしていまだ世の中で実現されていない実業アイディアについて熱心に話し合う。この作品の独創性は、なによりもその作中で語られる未来の実業アイディアが、詳細かつ膨大に書き込まれている点にあるだろう。それは、二十四時間営業の銀行から盗難保険、監視カメラ、圧搾空気を用いた車、温泉を用いた鶏卵孵化器まで多岐にわたるものである。本作をめぐって、二〇二〇年に発表した別稿で、こうした作中のアイディアの一部は現実の実業界の動きと呼応したものであり、掲載誌『実業少年』(一九〇八―一九二二、博文館)の他記事と結びつくように書かれていることの一端を、筆者は論じた<sup>(1)</sup>。

その後も調査を続けていると、「御手製未来記」に関してこれまで知られてい

ない重要な新事実を四点新たに発見することができたので、本稿ではそれを報告したい。

第一から第三の発見は、「御手製未来記」本文をめぐらるものである。第一は、旧熊本藩主・細川家に伝わる資料を管理する永青文庫(東京都文京区)に「御手製未来記」の露伴直筆原稿の完全なものが現存していると明らかになったことである。露伴の直筆原稿は現存が少なく、「御手製未来記」の原稿はこれまでその存在を知られていなかった。第二に、この原稿から得られる特に重要な新事実として「露伴全集」その他がすべて収録し損ねている「御手製未来記」の最終回が発見できたことである。第三に、この作品が連載された掲載誌『実業少年』を調査・蒐集していくと、いま述べた最終回は雑誌初出の段階でも存在していたことが確認できたことである。「御手製未来記」は、露伴の親しい友人だった石井研堂が編集した前述の『実業少年』に全十回にわたって連載されたことされ、それ以降は存在しないと現在まで考えられている。しかし、本当は、連載は全十一回だったのである。『露伴全集』は戦前から現在まで三度の刊行があり、そのいずれにも、本作は改題後の題名「番茶會談」で収録されている<sup>(2)</sup>。また、『露伴全集』以外に、八度に及ぶ再録も確認できる<sup>(3)</sup>。しかし、これらすべてに、筆者が原稿・初出誌双方で新しく確認した最終回の部分は収録されていない。そして、先行研究でも、こうした点を問題にしたものはない<sup>(4)</sup>。「御手製未来記」の現在知られている本文が、最終回を収録し損ねている事実は、これまでまったく知られていない。本稿の前半では、三つの事実の発見の詳細を報告し、さらに新発見の最終回の本文を書き起こし、広く共有したい。

そのうえで、第四に、以上の発見から発展的に得られた新知見を、特に重要と思われる一点に絞って述べたい。それは、露伴が構想していた「御手製未来記」の「本来の形」に関するものである。「本来の形」という言葉は、二つの含意で使う。一つは、いままでも知られていた本文に新発見の最終回を併せた形が「御手製未来記」の「本来の形」である、というごく通常の意味である。もう一つは、今回の発見を通して、「御手製未来記」の派生作品と呼ぶべき短編群が明確になってきたため、それらを併せることで「御手製未来記」の「本来の形」がよりはっきりと推察可能になる、という意味である。具体的には、なんらかの事情によって一九一一年十二月に「御手製未来記」の連載を十一回目で終えることになった露伴は、翌一九二二年に同じく『実業少年』上に六つの短編を

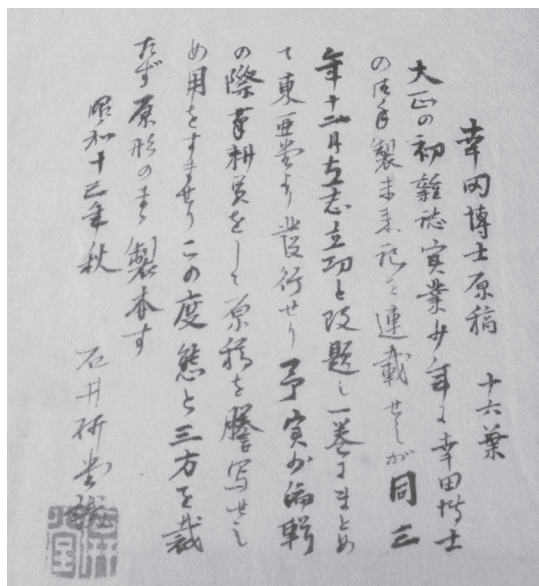
発表するが、このうち、明らかに毛色の違う一作品を除いた五作品は、当初「御手製未来記」のために用意したアイディアの流用だろうと推測できる。そして、この流れを捉えるうえで重要になるのは、新発見の文章で露伴が提唱する「実業学」なるものの根本原理「天然力の使用」「人力の整理」という二つの概念である。なお、本稿では、原稿と雑誌初出を重視するため、改題後の「番茶會談」ではなく、原稿と連載時のタイトル「御手製未来記」で表記する。また、筆者の発見は、雑誌初出で最終回を最初に発見したのち(二〇一九年、直筆原稿でも最終回の存在を確認した(二〇二四年)、という順序でなされたものだが、原稿→雑誌初出の順序で述べたほうがわかりやすいと思うので、以下、その順序で説明する。

### 一、永青文庫所蔵・幸田露伴「御手製未来記」原稿と最終回の発見

二〇二三年の夏、筆者は、永青文庫の学芸員・佐々木英理子氏から、展覧会「細川護立の愛した画家たち」(永青文庫、二〇二三年七月二十九日から九月二十四日)の案内と手紙を受け取った。佐々木氏からの手紙を一読して、筆者は非常に驚いた。佐々木氏からの手紙は、貴族院議員だった細川護立(一八三一年―一九七〇、念のためせば第七十九代首相・細川護照のおじいさんである)の蒐集した美術作品と併せて、彼がかつて神田の古書店・一誠堂で購入したらしい露伴「御手製未来記」の原稿をこの展覧会に出品するが、その解説文を書く際に筆者の「御手製未来記」を論じた論文を参照してくださったという内容であった。筆者が驚いたのは、そもそも「御手製未来記」の原稿が現存するという事実そのものが初耳であったためである。出口智之も言うように、出版社の消滅や戦災などの複合的な事情によって露伴の原稿の現存は少ない<sup>(5)</sup>。筆者はすぐその展示を見に行き、筆跡から露伴の真筆で間違いなしとの確信を得たのち、二〇二四年三月に改めて永青文庫でこの原稿の調査を行わせていただいた。この調査の際に、佐々木氏に話を伺うと、細川護立がこの原稿を購入した時期、購入の経緯、二〇二三年の展覧会以前にこれが公開されたことがあったかどうかなどは不明とのことであった(一誠堂から買ったことだけは資料に貼られたシールでわかる)<sup>(6)</sup>。存在が知られていない新資料だと言っているだろう。

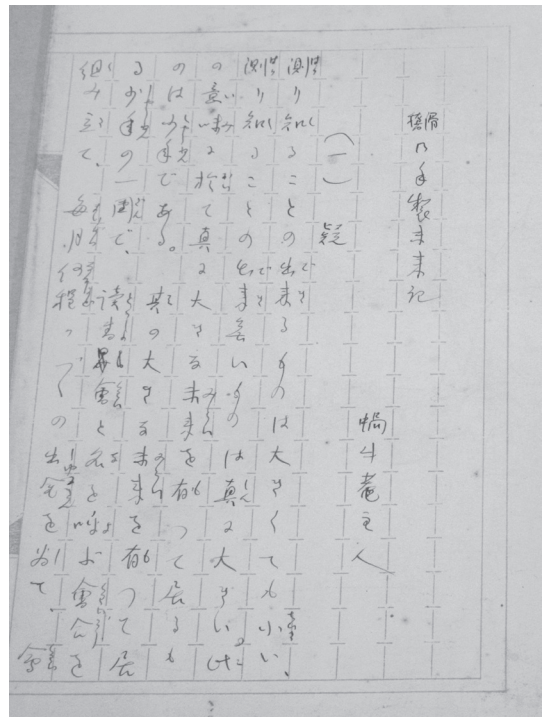
以下、直筆資料の概略を述べる。「御手製未来記」の原稿は、九冊にわかれて製本されている<sup>(7)</sup>。これは、『実業少年』の編集長であった石井研堂が行った製

本であり、九冊すべての見返しにはほぼ同一の言葉が掲げられている。一冊目の見返しから引用しよう。「大正の初雑誌実業少年に幸田博士の御手製未来記を連載せしが同三年十二月立志立功と改題し一巻にまとめて東亜堂より発行せり予實少編集の際筆耕員をして原稿を謄写せしめ用をすませりこの度態と三方を裁たず原形のまま製本す 昭和十三年秋 石井研堂識」と書かれている(大正の初は「明治の終」とあるべきで、この点は研堂の記憶違いだろう)(図版1)。つまり、「御手製未来記」が連載された一九一一年、露伴から「御手製未来記」の原稿をもらった研堂は貴重な資料となることを予見してか、その原稿を印刷所へ直接渡すのではなく筆耕員に写させ、写しの方を印刷所へ渡して露伴の直筆原稿はとっておいた、ということだろう。「昭和十三年」、つまり一九三八年は研堂が亡くなる五年前である。この年の八月、七十歳を過ぎた研堂は脳溢血の発作を起こす。死を予見した研堂は、自身が集めた膨大な明治文化史の資料をこの時期から整理していき、自身の死後は、大学に寄贈するもの以外は、一括して一誠堂にひきとってもらいたいと語っていたらしい<sup>(8)</sup>。「御手製未来記」原稿の見返しに記された「昭和十三年秋」は、研堂が自身の資料整理をはじめた時期と符合する。また、一誠堂からやがて細川護立が購入するというその後の経緯も、一誠堂に資料のその後を託したいと研堂が語ったという事実と符合する。



(図版1) 幸田露伴「御手製未来記」原稿・一冊目見返し、石井研堂による資料説明(永青文庫蔵)





(図版2) 幸田露伴「御手製未来記」原稿一冊目・作品冒頭部分(永青文庫蔵)。雑誌連載時は「(一)読書會と番茶會」、『立志立功』では「一、読書會」となる小見出しは、原稿では「(一) 疑」とある。

原稿は、縦二十字、横二十行の茶色野線、製造者の記されていない原稿用紙を主に使っているが、原稿用紙が足りなくなったのか便箋のようなものに最後の部分が記された巻(三冊目)や芥川龍之介なども愛用した縦二十字、横二十行の松屋製の青野線の原稿用紙に途中から変わっている巻もあり(九冊目、筆ではなくペンで書かれている(図版2)。研堂が自宅に來た際に原稿が途中までしかできておらず、できたところまでを渡したのだろうか、あとは今日中に送ると欄外に書いてあるような箇所(八冊目)などの興味深い部分もある。作品タイトルは、一・二冊目が「滑稽」と角書をつけた「御手製未来記」で、三・六・七・九冊目は角書きなしの「御手製未来記」、四・五・八冊目は省略して「御手製」になっており、署名は、一冊目が「蝸牛庵主人」、二冊目が「露伴道人」、三冊目が「幸田露伴」、四冊目から八冊目は署名無し、九冊目が「露伴」である。ルビの指定を細かく書いている箇所が多い。第二次『露伴全集』では、すべての巻ではないにせよ、巻頭に原稿の影印が掲げられている巻が多いが、その影印のさまざまな時期の露伴の原稿と見比べると、使用している原稿用紙やラフなペン書きの文字から受ける印象が、第十五巻の巻頭に掲げられた「神仙道の一先人」(一九一九年)の原稿ともっとも近い(注6に記したように、奇しくもこの原稿も細川護立のコレクションである)。原稿の本文と雑誌初出や単行本化された時の版と校合

してみると、小見出しのつけたかや細かい語句の揺れの差異はあるにせよ、八冊目まではこれまで知られてきた「御手製未来記」の内容と大きな差異はない。しかし、今回の発見でもっとも注目すべきは、この原稿の九冊目である。九冊目には全集その他がすべて収録し損ねている「御手製未来記」の本来の最終回が記されており、これは「御手製未来記」理解を大きく更新するものだからである。新発見の最終部分を書き起こす前に、次に、その最終部分は雑誌初出でも確認できている事実を先に説明しておく。

## 二、『実業少年』雑誌初出での最終回の発見

本論「はじめに」でも述べたように、筆者は、「御手製未来記」に知られていない最終回があることは、「御手製未来記」が掲載された雑誌『実業少年』の調査・蒐集を通じて実は数年前から知っていた。一九〇八年から一九一二年に博文館から刊行された『実業少年』は、中学校、高等学校、大学といったエリートコースに進む者ではなく、高等小学校卒業程度で学業を終え、はやくから実業に従事する年少者やその周辺を想定読者とし、彼らの知的な飢えに応えようという啓蒙的使命感をもって石井研堂が編集・刊行した雑誌であり、露伴は頻繁に寄稿した<sup>(9)</sup>。『実業少年』を持つ図書館は少ないものの、所蔵が比較的充実しているのは、大阪府立図書館国際児童文学館、札幌大学図書館、日本近代文学館、国立国会図書館などである。「御手製未来記」の初出は、第二次『露伴全集』第二刷では、一九一一年、『実業少年』の①一月号・②二月号・③四月号・④五月号・⑤六月号・⑥七月号・⑦八月号・⑧九月号・⑨十月号・⑩十二月号に全十回にわたって掲載された、と書かれている(連載回の番号は筆者が補った)<sup>(10)</sup>。この『露伴全集』の記述は、柳田泉『幸田露伴』で挙げられた書誌を参照しておそらく書かれたものだろう<sup>(11)</sup>。また、『露伴全集』に収録された浦西和彦作成「初出目録」を確認すると、①⑥に関しては初出誌で確認できたが、⑦⑩に関しては、初出誌をあたることができなかったと記されている<sup>(12)</sup>。筆者は二〇一八年ごろから、先述の四つの図書館に所蔵されている『実業少年』に基づいて、「御手製未来記」の初出を確かめていった。このうち、①(『実業少年』五卷一号)、②(『実業少年』五卷二号)、③(『実業少年』五卷四号)、④(『実業少年』五卷五号)、⑤(『実業少年』五卷七号)、⑥(『実業少年』五卷八号)、⑧(『実業少年』五卷十号)、⑨(『実業少年』五卷十一号)は図書館で初出を確認できたものの、『実業少年』という雑誌は、刊行年の後半になるほど現存が少なく、⑦(『実業少年』五卷九号)、⑩(『実業少年』五卷十三号)



(図版3) 露伴「御手製未来記」の新発見の最終回が掲載された『実業少年』第5巻14号表紙（博文館、1911年12月）（筆者蔵）

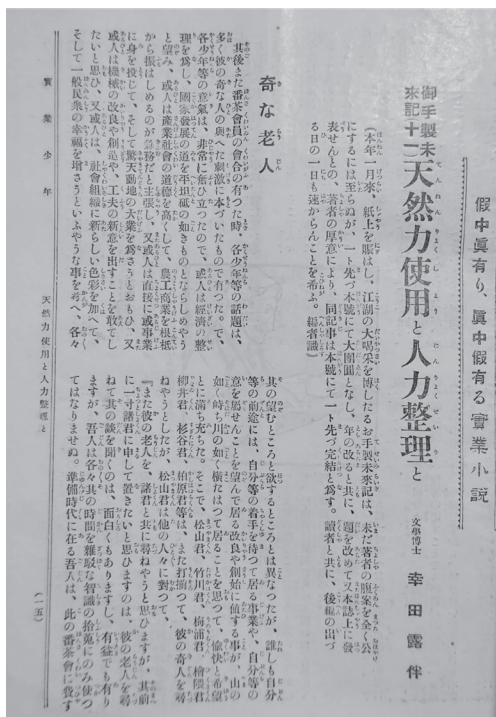
そしてこれは、前述の「御手製未来記」原稿の九冊目に記された内容とほぼ完全に符合していることが、二〇二四年三月の永青文庫での調査で確かめられた。以上のような経緯で、「御手製未来記」の初出をすべて確認し<sup>(13)</sup>、原稿・初出双方から百年以上の長きにわたって忘れられていた幸田露伴の文章、しかも創作作品の最終回を発見することができた。次に、この全文を書き起こし、公開したい。

幸田露伴「御手製未来記」（十二）天然力使用と人力整理と』『実業少年』五巻十四号（博文館、一九一二年二月）十五―二〇頁

号は所蔵している図書館を見つけれなかった。しかし、二〇一九年、ある古書店から『実業少年』の八冊揃いが出品されているのを筆者は見つけた。それは、五巻七号から五巻十四号まで欠けのない八冊揃いであり、露伴が「御手製未来記」後半を連載していた時期のものである。筆者はこれを購入し、中身を確認した時も非常に驚いた。筆者が確認した限りではこの図書館にも所蔵がない『実業少年』五巻十四号に、これまで知られていない「御手製未来記」の連載第十一回目が掲載されていたからである（図版3）（図版4）。雑誌初出時の「御手製未来記」最終回の書誌情報を次に挙げる。

### 三、新発見の「御手製未来記」最終回の本文について

その前に改めて、原稿で言えば九冊目、連載で言えば第十一回目の最終回の直前がどのような話であったかを簡単に確認しておく。「妙な人」のもとを訪れた少年たちは、これまでも自活の方途や未来の実業アイディアをめぐる「妙な人」と活発な議論を交わしてきた。三回めに「妙な人」を訪問した際には、これからの生産は「製造工程の整理」が大切であり、「手工的」に生産を行うのではなく、「分業的・連絡的」にものを生産するようにしなければならないという話などをする。第三回めの訪問でもっとも中心的な話題になるのは、養鶏である。鶏肉や鶏卵の利用拡大のためには、まず卵を人工的に孵し、雛を効率的に増やす方法を確立しなくてはならないと「妙な人」は言い、火山国である日本は温泉が豊富なのでこれを利用した鶏卵孵化器を発明すれば、鶏肉や卵の利用を拡大させることができるだろうと、具体的な試算を挙げつつ述べる。その話を聞いた少年たちは、「皆々は、如何にも連絡的分業的でなければ生産の発達は望めぬと感じた」と描写され、この一文までで本作は終わったと思われる<sup>(14)</sup>。これが終わりであるならあまりにも唐突で中途半端であるが、以下に示す原稿九冊目、連載では第十一回めで改めて少年たちの第四回目の訪問を露伴は描き、最終回らしくまとめてこの作品を終えていることが確認できた。以下の最終回も併せて読むことで、「御手製未来記」は、連載当時に『実業少年』の読者が読



(図版4) 露伴「御手製未来記」新発見の最終回掲載ページ冒頭、『実業少年』第5巻14号、15ページ（博文館、1911年12月）（筆者蔵）



んだ「本来の形」となる。

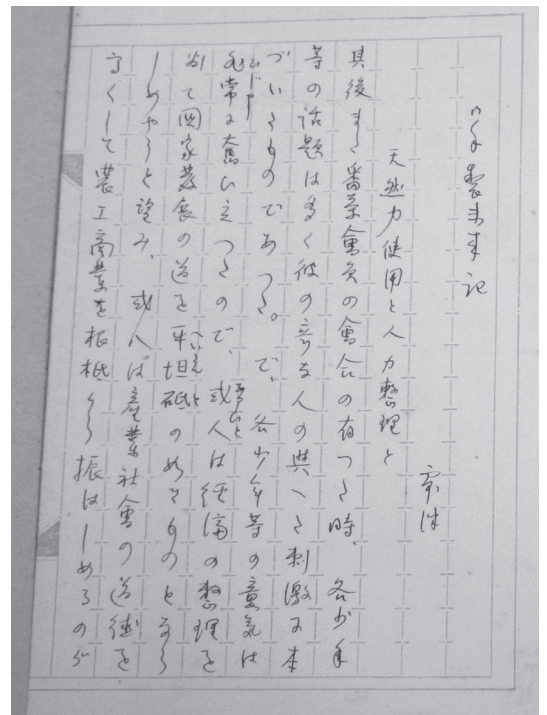
\*以下では、原稿と校合させつつ(図版5)、連載時に読者が読んだ形を再現することを重視し、雑誌初出を主にして書き起こした。雑誌掲載時には、文の一部を大きなフォントにして強調する処理がなされているところがあるがそれは省略した。

## 御手製未来記(十二) 天然力使用と人力整理と

文学博士 幸田露伴

### 奇な老人

其後また番茶會員の會合の有つた時、各少年等の話題は、多く彼の奇な人の與へた刺激に本づいたもので有つた。で、各少年等の意氣は、非常に奮ひ立つたので、或人は經濟の整理を爲し、國家發展の道を平坦砥の如きものとならしめやうと望み、或人は産業社會の道徳を高くして、農工商業を根柢から振はしめるのが急務だと主張し、又或人は直接に或事業に身を投じて、そして驚天動地の大業を爲さうとおもひ、又或人は機械の改良や創造や、工夫の新意を出すことを敢てしたいと思ひ、又或人は、社會組織に新しい色彩を加へて、そして一般民衆の幸福を増さうといふやうな事を考へ、各々其の望むところと欲するところとは異なつたが、誰しも自分等の前途には、自分等の着手を待つて居る事業や、自分等の意を属せんことを望んで居る改良や創始に値する事が、山の如く崎ち川の如く横たはつて居ることを思つて、愉快と希望とに満ち充ちたそこで、松山君、竹川君、梅浦君、檜隈君、柳井君、杉谷君、柏原君等は、また打揃つて、彼の奇人を探ねやうとしたが、松山君は他の人々に對つて、『また彼の老人を、諸君と共に探ねやうと思ひますが、其の前に一寸諸君に申して置きたいと思ひますのは、彼の老人を探ねて其の談を聞くのは、面白くもありますし、有益でも有りますが、吾人は各々其の時間を雑駁な智識の拾遺にのみ使つてはなりません。準備時代に在る吾人は、此の番茶會に費す時間位を、吾人の消費し能ふ餘裕の限度の時間と致しておいて宜いと思ひます。で今度は、彼の人を探ねまして、談話を聞くにしても、成るべく根本的の談を先づ聞きまして、そして其の後は時間の或る時ごとに、各々が随意に訪問することと爲やう



(図版5) 幸田露伴「御手製未来記」原稿九冊目・新発見の最終回の冒頭部分(永青文庫蔵)。「奇な老人」の小見出しは原稿にはない。読者にわかりやすくするために、研堂が掲載時に付け加えたのだろう。

と思ひますが、何様でしょう諸君。』  
と言ひました。此の思慮ある言には、誰も異論の有らう筈は有りませんでした。  
『根本的、根本的。』  
といふ聲は、彼方からも此方からも聞えしました。  
『松山君の氣の付かれた事は、實に宜い事だと思ひます。』  
と柳井君は明らかに賛成した。そこで人々は今度は根本的の談話を聞かうといふ事に一致して其の夜彼の人を探ねた。  
『ア、皆さん御揃で御來臨ですナ。サア此方へ。』  
と、主人は例の如く無造作である。  
『先日は誠に種々の御談を伺ひまして有り難うございます。其後また私共會員の伺ひました折も、有益なお話を伺ふことを得ましたさうで、御話の趣は又聞ではございますが、逐一伺ひましてございます。誠に有難うございます。何様も度々御邪魔を致して済みませんが、今日は一つ、今後我々が世に立つて行きますに就て、即ち何か知らの事業に立つさはるものとして、其の心得になるやうな根本的の御談を伺ひたいと思ひます。たゞ今のところは皆年齢も足りませぬし、申さば準備時代の者ですから、今直に何の事業に取り掛るといふことも出来ぬものですが、御談によつて、僕等の前途は洋々として海の如きものだ

いふことを知つて、其を信じて居ますから、急かす慌てずに何れ何かの事業に取つて掛つて、そして其に一身を委ねて、國家の爲にも一身の爲にも一生を働かうと思つて居ります。で、伺ひたひのは、今後の事業の世界に於て、何様な事を標準にもし方針にもしたらば宜からうといふことで、その根本的の御談を伺ふことが出来たら大層有益なことだらうと思ひますが。』

と、松山君は流石に考へて置いたと見えて巧く談話の緒を手繰つた。

### 實業學

主人は一寸考へたが、直ちに明らかな口調で答へた。

『ハ、御尋の意味は分りました。御道理で、そして要領を得た御尋問です。俺等の申すことでも諸君の利益の萬一を補ふことが出来れば、幸福ですから、思ひ付いた事だけを有體に申ませう。』

『ヤア有り難うございます。何様か然様願ひます。政治に志して居るとか、兵事に志して居るとか、政治學も有り、兵法も有りますが、實業に志すものに對しては、實業學といふやうなものは有りません。たゞ其様いふやうな意味に近い題目の上に就て諸を爲したものが無いでは有りませんが、多くは皆個人に對する教訓でして、實際の事業其物に對しての教では有りません。親切で有れとか、正直で有れとか、勤勉で有れとか、決斷をよくせよとか、勇敢なれとかいふやうな教訓は、皆道理な事で、そして其は僕等に取つて甚だ大切な教であるとは十分に信じて居ますが、それ等は個人に對しての教で、事業其物に對しての教では有りませんから、彼様いふ教も結構には相違有りませんが、彼ばかりでは足らぬやうに思ひます。』

柳井君の言ひ足した尾について、杉谷君も亦言ひ足した。

『兵法は僕は知りませんが、聞き齷りですけど、兵法で言へば、勇仁嚴勇信で有れといふのは、将校たる人の、個人に就ての教で、敵を知り己を知る必要が有るとか、地を觀て兵を屯せしむるとか、戦争其物に就ての教だと思ひます。で、僕等の今伺ひたいのは、實業に従事する個人に就ての教では無く、實際の事業其物に就ての教で、そして其の部分的でなく、合體的で、枝葉的で無く根本的の事なのです。』

主人は笑つた。

『ハ、ハ、大分むづかしい御尋問ですな。うまくの答が諸君の希望に協へばよう

ございます。

併し試みに先づ一端を申して見ませう。事業學といふやうなものは、仰ある通り何も出来てあませんから、容易に要領を得て、而して組織的になつて居るものを、今こゝで急に開陳することは出来ませんが、前日來御談した通りの世の中なのです。何の事業をなすつても、其の事業さへ發展進捗の餘地の有る事ならば、甚だ結構な事なのです。併し實世間の事業といふ事になりますと、何も皆、

### 『力』

の關からぬものは有りません。それは其筈で、形の有るもの、即ち物を取り扱ふのが、此等實世間の事業といふものなのです。『力』の關からぬものは無い道理なのです。そこで、『力』をよく使ふといふことが、實際世界の事業の進歩と言つても宜しい位なのです。

『力』の最も大なるものは『天然力』です。次で大なるものは『人力』です。人力も言ひ換へて見れば、矢張り天然力の一つのやうなものです。先づ理屈っぽく言はなければ、風や潮や重力や水力や動植物の生活力や、そういうものを『天然力』といひ、人間の手足肢體を使用して生ずるところのものを『人力』と云つて居ます。さて實際世界の事業の根本的の談になると、俺は『人力の整理』と『天然力の使用』といふ事を二大箇條として標榜して過失は無く、そして其によつて未來の大世界を建立し得ると思ひます。先づ、

### 天然力の使用

が巧みになつたので、廿世紀の文明は出来て居ると言つても宜いのですが、まだ十分使用し盡して居るのでは有りませんから、今後此の點に於て一歩でも踏み出し得る人が有りますれば、其の人は即ち事業界の勇士で、同時に世界の恩人なので有ります。水の浮力を利用して古代の人が舟といふものを初めて造りました時、どれ程世界の運輸事業は進んだでしやう！。如何に大力の人でも米五十苞は扛げ得ますまい。五十苞は持ち得ても百苞は持ち得ますまい。併し百苞の米を舟に載せますれば、一人の力で之を動かす得ます。水の浮力を使用した結果は實に驚くべきです。帆といふものを考へだして、風力を使ふやうになりましたからは、千石でも二千石でもの米を、脚へ煙管で、ようそなどと言ひながら船頭が海上に運輸の事業をするやうになりました。これも大層な進歩でありまして、斯様に天然力を使用することが、段々と開けて來てか



ら、人間と禽獣の幸福の差は非常にことになつて來たのです。風車が出来、水車が出来、水力電氣が出来、穀物も粉になれば、米も搗け、絲もあがり、燈火も出来、車も駛るといふやうになる、そのみでは有りません、微菌の作用を借りて酒を造り、太陽熱や水土の間に起る化學作用を使用して、我が欲する穀物を得るなど、何から何まで人間の爲る事に天然力を假らぬのは無い位です。それでそれから、『能く天然力を使用するは人間を幸福にする所以』です。文明といふのは、天然力を使用する程度が、野蠻人に超えて居るに過ぎぬと云つても、物質世界からのみ論じたら差支は無いのです。それですから、天然力の使用といふ事に目をつけて、今まで用ひられて居る天然力ならば、猶それを巧みに使用して無益の消耗の無いやうにすると、又從來の方面と異つた方面に利用するとか、若し又用ひられて居らぬ天然力ならば、之を使用する方法を嚴明するとかいふことを心に懸けるが宜いので、其の結果は決して個人の利益のみでは無いのです。夏日空中に起る電氣力の如きは、算數に載らぬ不定量のものですから、使用者に取つては、確實な益を與へませぬものですが、日本は山岳の多い國ですから、雷が與へる利益は無いにせよ、害は中々有ります。害のあるのは即ちそれだけの『力』の存して居る證なのです。此も他日利用する段になれば、其力は甚だ多いでしやう。又温泉が多い。火山が多い。此等も利用せぬといふのは、智が足らぬからです。今では温泉熱を利用して製鹽事業をするといふ事も、少しは起つて居ますが、獨り製鹽のみでは無い。何にでも使へば使へるでせう。火山の熱を利用など、いふ事は、歐洲や米國には例が無いに相違ないが、これだけ火山に富んでいながら、之を利用するの道を講じ無いなどは甚だ愚で、若し上手に之を使用することが出来たらば、

#### 東京中の竈は淺間山一つで足りる

といふやうな事になるかも知れませぬ。今日で申せば、戯談に過ぎませぬが、火山熱を利用せぬなど、いふ事は、利用の出来る世になつて見たらば、風力水力を用ゐなかつた時代を吾人が嘲笑するやうに愚な事かも知れませぬ。潮流の力なども、海峡を爲して居る地方は、非常に強いのです。これも利用し得た晩には、實に莫大なものでせう。石炭を焚くのも、古代の太陽熱の變形して居るものを利用するに過ぬのですが、太陽熱の利用も亦甚だ不十分です。凡そ此等天然力を使用したらば、何んな利を得るか知れませぬ、世界の大勢は、此の問題に向つて居るので、そして第二には其の無益の消耗を防ぐにあるのです。電燈

は熱を要しませぬのに、エヂソンの電燈球に觸れて見れば熱が有ります。光を要するに熱は要りません。其の熱だけは無益に消費されるのです。そこで工夫をして其の熱になるだけの量を、光にすれば、電氣の消費量は同じで、光りは増す譯ですから、ずん／＼と改良されて、今ではエヂソン式は廉價に出来るといふだけで廃されずに居るやうな譯です。

#### 『人力の整理』

といふことは、我が國目下の状態に取つては、天然力使用の問題以上に適切な問題です。これは、『無益無効に人力が消費されるのを防いで、なるべく有益有効に消費するやう』にするといふ事を意味します。東京中で戸々に火を焚き、戸々に飯を炊いて、戸々に副食物を造つて居る、其の労働手数は實に馬鹿々々しいのです。一處に其丈の事をしたら何程の利だか知れませんが、かういふ事を何の方面にも行つて居るのです。前に申した聯絡的分業的になつて行くのは、此も世界の大勢です。ですから、人力整理が行はれて、むだに人間の労働することが無くなるやうに、社界の組織や、事業の組織を執り行ふて行けば、其の利は決して其の一面にのみ止まりません。すべて、衝突だの矛盾だの重複だのといふ事を省くのは、商業は申すに及ばず、一切の社界の事業の進歩の意味です。上は政府から下は一家の事まで、スラ／＼と運ぶのは即ち人力整理が出来たのです。取り立てた租税の金額と、租税取立役人の給料とが、差引勘定して見ると、何も残らぬなど、いふのは、一番人力整理の行はぬ場合でして、およそ世の中に、そんな愚なことは有りません。ところが實際の世間を見ると、其と同様の事が随分多いものでして、堂々たる商業者間にも、まだ決して人力整理は行届いて居りません。國家は國家で、兵士など、いふものが無くては濟まぬのが、二十世紀の文明状態ですが、兵事位馬鹿げた人力の消費は有りはしません。併しそれは今如何ともし難いのですが、何様かして大なり小なり何によらず人力整理をして、無益に人力の消費せぬやうに爲さうと企て、そして其が一步でも進めば、それだけ幸福は殖る道理です。人力整理天然力使用、此の二つは實際世間の事業の進歩の標準にもなれば、方針にもなりませうと思ひます。どうです、此は根本の論では有りますまいか。』と説き終つた時、各少年は各道理と感じた。『解りました。僕は天然力利用に於て一步でも足を進めやう』『僕は商業に従事する積りだが、何をする上に於ても人力整理を心がける』

『僕は右の手で天然力を利用し、左の手で人力を整理して用ゐやう』

『ハ、それが宜(よろ)からう、く。』

主人と客とは各満足して、静かに茶を味はつた。其の茶は此家でも、彼の番茶であつた。(大團圓)

以上が、「御手製未来記」の本来の最終回である。注目されるのは、実業アイディアを思いつくための根本的な原理を少年たちが問い、それに「妙人」が応じるその内容だろう。少年たちの問うていることは明快で、「親切であれ」「勤勉であれ」といった個人への道徳的訓戒ではなく、将来、実業を志すとき、考え方の基礎になるようなこと(「根本的事」)を教えてほしい、というものであった。それに応じて、「妙人」は、どのような事業であっても「力」が関係ないものはないと言い、その「力」を二つに弁別して説明する。「天然力」と「人力」である。そして、実業学・事業学といったような学問はまだ存在しないが、これらの「力」を「よく使う」ことが重要なのだと言い、「未来の大世界」は、「人力の整理」「天然力の使用」という二つの原則から創り出すことができる、とする。「天然力の使用」とは、現代風に翻訳すれば、いまだ利用されていないエネルギーに着目すること、あるいはすでに利用されているエネルギーのさらに効率的な利用を考えることであり、「人力の整理」とは、これも現代風に換言してみれば、労働力その他の効率のよい運用ということになるだろう<sup>(15)</sup>。このようにまとめられてみると、「御手製未来記」で展開されたアイディアのうち、圧搾空気を利用した車や温泉を利用した鶏卵孵化器などは「天然力の使用」という原理を發展させたものであり、警察が盗難保険会社を兼業すればよいというようなものは「人力の整理」という原理を發展させたものに確かに見えてくる。「御手製未来記」を終えるにあたり、露伴は、作中で膨大に示した未来の実業アイディアの原理を「天然力の使用」「人力の整理」という二つの概念で明晰に示していた。『実業少年』は、同時期に刊行され少年向けのビジネス雑誌として似た志向を持つ『成功』(成功雑誌社、一九〇二・一九一五)と比べると、精神的な記事が少なく、商工業の仕組みを具体的に説いた記事や科学にまつわる記事が多い。これは編集長の石井研堂の志向によるものだったが、露伴の最終回の内容は、こうした媒体の特性とも響き合うものだっただろう(その一方で露伴は『成功』に寄稿することも少なくなかった)。

さて、ここで問題になるのは、連載を一九一一年に終えたのち、一九一五年に『立志立功』へはじめて再録するに際して、「御手製未来記」の根本的な部分を説いた最終回が収録されなかったのはなぜなのか、という点だろう。

この点に関しては、露伴本人をはじめ、『実業少年』の編集をした石井研堂や、露伴全集の本文校訂に深く関わった塩谷賛などもなにも言及していない。また、直筆原稿や雑誌初出、初再録『立志立功』にもこれを考えるための直接のヒントになる記述はなかった。したがって、間接的な根拠による推測に過ぎないが、三つの方向が考え得ると筆者は思う。第一は、露伴の創作的意図による削除である。第二は、検閲を意識して露伴本人あるいは出版社・東亜堂が行った自粛による削除である。第三は、これが事実なら拍子抜けするが、単なる編集上の手違いによる欠落である。これら三つの推測の根拠はいずれも間接的なものに留まるので、はっきりとしたことは言えない。しかし、筆者は、第一の事情(創作的意図による削除)は考えにくく、第二の事情(検閲を気にしての自粛)にも疑問が残るので、第三の事情(単なる手違い)が案外、実情に近いのではないかと推測する。

まず、筆者の推測とは異なるが、これが創作的意図による削除だと考える方向の材料があることを述べておく。それは、一九一五年、『立志立功』への最初の再録に際して、収録作品の内容には大きな修正はないが、改題、章立ての変更、字句の修正・加筆・削除などが多く行われている、という事実である。『立志立功』には、「御手製未来記」を改題した「番茶會談」、「供食會社」(『実業少年』六巻一号、一九二二年一月、「人世の萬事を豫知すべき道具」を改題した「人事豫測表」(同六巻三号、一九二二年三月)、「芥子大黒」(同六巻二号、一九二二年二月)、「小農園」(同六巻五号、一九二二年五月)、「米価問答」(同六巻九号、一九二二年八月)、「人間世界の主催者たる鐵の面白き研究」「人間世界の主催者たる鐵の研究」を改題した「鐵の物語」(同三巻十四号、一九〇九年十二月、同四巻二号、一九一〇年二月)がこの順番で収録された<sup>(16)</sup>。初出時と『立志立功』の文章を見比べると、これら全ての文章に露伴が微細な修正を入れていることがわかる。今回発見できた「最終回」が本来収録されるべきではないかと思われる個所の、直前・直後もその例外ではない<sup>(17)</sup>。つまり、この本を露伴がきちんと校正したような痕跡もうかがえる、ということである。この点を重く考えれば、「最終回」の削除は再録の際に露伴が自らの創作的意図によって行ったものだという可能性もある。しかしながら、



こうした事実のある一方で、これはおそらく露伴の創作的意図による削除ではないと筆者が考えてしまうのは、ここを削除することで「御手製未来記」という作品全体が良くなったとは到底思えない、という一事に尽きる。ここを削除することの積極的意味は見出しにくい。繰り返しになるが、これまで知られている「御手製未来記」の本文は、非常に中途半端な箇所で終わっている。この作品は、登場人物たちになにかの出来事が起こるような通常の小説と言うよりは、登場人物たちの会話に描かれる実業アイディアを読ませようとするものだが、今まで作中で展開された実業アイディアを「人力の整理」「天然力の使用」という原理でまとめ直す最終回は、なんらかの事情によって連載を終えようとする性急さが筆致からうかがえるにせよ、作品の主題を明確に語った部分であり、ここがなければ画竜点睛を欠くだろう。

第二に考えうるのは、検閲を気にして露伴または出版社があえて最終回を削除したという可能性である。今回発見できた最終回には、「國家は國家で、兵士など、いふものが無くては濟まぬのが、二十世紀の文明状態ですが、兵事位馬鹿げた人力の消費は有りはしません」という戦争批判の一言が含まれている。しかし、まず、この程度の一言が実際の検閲にひっかかるとは思えない。この作品の約三年前、一九〇八年に出た漱石「三四郎」では、日露戦争後の日本を「滅びるね」とこともなげに言う広田先生を描写してさしたる問題になっておらず、それと同程度の文明批評だろう。明治期や大正期の検閲で主として問題になったのは、「風俗壊乱」につながるとされた性をめぐる記述、「秩序紊乱」につながるとされた皇室批判や社会主義賛美の言論であるが、それに直接に該当しないこの程度の言葉は許容されたと思う。ありえるとしたら露伴または出版社が検閲を過剰に意識して削除した可能性だが、その場合もこの一文の削除だけで対処できる問題に思え、最終回全体を削除する必要は認められない。

歴史に起こることの背後に、深い理由がいつもあるとは限らない。今回の場合、はなはだ拍子抜けする推測になるが、まず、初再録の単行本『立志立功』を編集する際、なんらかの手違いによって最終回の欠落は偶然に起こったのではないか<sup>(18)</sup>。ところが、不完全なその本文は、露伴自身の校正の跡もうかがえたために、著者の適切なチェックを経たもののように現在まで扱われてしまった。さらに、直筆原稿の存在が今日まで知られておらず、掲載誌『実業少年』も図書館にあまり所蔵されていない稀少な雑誌で研究も少なく、新発見の文章

を含む巻号をおそらくどの図書館も持っていなかった。したがって、幾度にも及ぶ生前・没後の再録に際して、原稿と校合したと思った人、初出をすべて確かめようとした人も当然いただろうが、このような状況のために完全な確認が困難であった。こうしたさまざまな偶然が作用した結果、最終回が欠落した『立志立功』の本文が百年以上にわたって再録され続けて現在に至ったのが実際ではないかと思う。

この点を考えるうえで、付随して複雑に思えるのは、新発見の文章の「その茶はこの家でも、彼の番茶であつた」という終わり方である。これも先述のように、再録に際して、一九一一年の「御手製未来記」から「番茶會談」へ、露伴は作品タイトルを変えている。この作品タイトルの変更は、最後の一文がこうして番茶の描写で終わることと無縁には思われない。作品の冒頭すぐにも「番茶會」という少年たちが組織する会を描写する中で「番茶」の話が登場したので、作品の最初と最後を「番茶」の描写で呼応させて終わつたのだろう、と考えられる。しかし、「番茶會談」と改題した『立志立功』に、肝心のこの最終回の本文は収録されていない。これも推測に過ぎないが、露伴本人は、「御手製未来記」が十一回分、完全に収録されているつもりで、冒頭と終わりを呼応させて書いた記憶が頭にあつたために、再録の際、「番茶會談」と改題したのではないか。しかし、編集が不完全なまま単行本化され、本来の最後の一文を欠くために、改題のニュアンスもはつきり伝わらないようになってしまったのかも知れない。なぜこの最終回が再録の際に収録されなかったのかという点には確定的なことは言えないため、なんらかの意図によるものという可能性も排除できないが、単純な編集上のミスであつたというのが蓋然性の高い推測に思える。

#### 四、露伴「実業学」の連鎖

最後に、「御手製未来記」最終回の発見からさらに発展的に得られた新知見を、一つに絞って述べたい。今回、新しく発見することのできた雑誌連載の最終回には、おそらく石井研堂と思われる編者が、次のような文章を付している(図版4)。

本年一月來、紙上を賑はし、江湖の大喝采を博したる御手製未来記は、未だ著者の腹案を全く公にするには至らぬが、一ト先づ本號にて大團圓とな

し、年の改ると共に、題を改めて又本誌上に發表せんとの、著者の厚意により、同記事は本號にて一ト先づ完結と爲す。讀者と共に、後編の出づる日の一日も速からんことを希ふ。 編者識<sup>(19)</sup>

新たに二つの事実が明らかになったという意味で重要な証言である。まず、一つ目の事実は、「御手製未来記」の最終回までの十一回の連載は「未だ著者の腹案を全く公にするには至らぬ」ものであり、実際に書かれた「御手製未来記」よりも長大な「腹案」を露伴は持っていたらしい、ということである。もう一つは、「年の改ると共に」、つまり翌一九一二年になったら、こうした「腹案」を露伴は「題を改めて又本誌上に發表」する予定だ、と広告されている点である。なんらかの事情により、本来の構想なかばで「御手製未来記」は終了することになり、「最終回」は書かれたようだが、この「最終回」を加えても、露伴の当初の構想から見れば達成半ばのものだったようだ。他方で、すこし目を転じてみれば、当初の「腹案」は、『実業少年』という同じ媒体のうえで、引き続き、形を変えて露伴が書き継いだと考えることができる。「御手製未来記」の連載が一九一一年に終了したのち、続く一九一二年、露伴は、『実業少年』に六本の創作を發表した。この六本のうち、水を主人公とする(念のため記すが、これは本主に字義通りの意味である)「磐根水之助自傳」(『實業少年』六卷七号、一九二二年七月)は毛色の異なる作品だが、これ以外の五作品、「供食會社」(同六卷二号、一九二二年一月「芥子大黒」(同六卷二号、一九二二年二月)「人世の萬事を豫知すべき道具」(同六卷三号、一九二二年三月)「小農園」(同六卷五号、一九二二年五月)「米価問答」(同六卷九号、一九二二年八月)は、筆者の考えでは、当初「御手製未来記」の一部として露伴が構想していたものであり、それを短編のかたちで發表したものである。このうち、「磐根水之助自傳」は、水の姿の変化を水自身の一人称で書いた科学小説で趣が違うが、他の五作品は、当初露伴が「御手製未来記」の一部として構想したものであったろう、と内容から推測できる。これらは、いずれも、「御手製未来記」の最終回で露伴が述べていた言葉を使えば、「天然力の使用」あるいは「人力の整理」をめぐる「実業学」的アイディアを描いたショートストーリーだった。「供食會社」では、苦学生二人が自炊の苦勞を語り、清潔で廉価な「供食會社」が存在したらどんなにいいだろうと語り合う。「芥子大黒」では、コロンブスが岸边に漂着する植物を見て別の大陸の存在に気づいた話などを例として、小

なものへの観察からひらめきが生まれ、偉大な事業を起こすに至るような成功が語られる。「人世の萬事を豫知すべき道具」では、世の中のさまざまな事象の「蓋然率」を測定することの重要性が述べられ、確立や統計の持つ有用性に光が当てられる。「小農園」では、遺伝子工学を先取りするかのよう、品種改良を志して植物を育てる少年が描かれる。「米価問答」では、米価格の相場の値動きがなぜ起こるのかをめぐる対話がなされている。便宜的に分類すれば、「芥子大黒」「小農園」は「天然力の使用」をめぐるストーリーという側面が強く、「供食會社」「人世の萬事を豫知すべき道具」「米価問答」は「人力の整理」をめぐるストーリーという側面が強い。先の引用部のように連続性が事前に告知されているので、『実業少年』の当時の読者には確実に「御手製未来記」の派生作品群として読まれただろう。一九一二年に書いたこうした短編群と前年の「御手製未来記」との連続性は、単行本『立志立功』が編まれた際、「磐根水之助自傳」を除くすべてが同じ本に収録され、その序文で「皆架空の言なりと雖も其の談ずるところ據る所無きはあらず」<sup>(20)</sup>と「皆」とひとまとめにして露伴本人が語る点などからこれまでも漠然と把握しうるものではあり、また柳田泉のように、これらの作品群を「実業鼓吹小説」<sup>(21)</sup>と呼んでよく似た傾向の作品群と考える理解もすでにある。しかし、一九一二年に發表された短編のうち五つに描かれる実業アイディアが、そもそも「御手製未来記」という長い作品の一部を構成するものとして露伴が考えていたもので、そのアイディアの流用と考えられることは、これまでの研究では把握されていない。しかし、一九一一年に構想半ばで不本意ながら最終回が書かれた「御手製未来記」と一九一二年の五つの短編とをはっきりと連続するものとして理解する観点に立つと、書かれなかった「御手製未来記」の「本来の形」も若干推測できる。それは、この世にまだなされていない多くの未来の実業アイディアを、「御手製未来記」のこれまで知られてきた本文のように極めて具体的に述べていきつつも、「天然力の使用」「人力の整理」という「実業学」の原理を意識させ、一つの問題に対して「天然力の使用」「人力の整理」どちらかの観点、あるいは両者を統合させた観点から答えを出していくことを実践するような展開になったのだろう、と思われる。たとえば今回発見した最終回の文章と、その翌月に出た「供食會社」の文章を併せて読むとき、それは明瞭に見てとれる。さきに全文を示した最終回の中で、「妙人」は「人力の整理」を語り、「東京中で戸々に火を焚き、戸々に飯を炊



いてゐ、戸々に副食物を造つて居る、其の勞働手数は實に馬鹿々々しいのです。一處に其丈の事をしたら何程の利だか知れませんが、かういふ事を何の方面にも行つて居るのです」と述べていた。こうした部分の着想を拡大し、別の一篇に仕立てていったのが「供食會社」という直後の作品であり、「ここに一大供食會社が出来て、不潔不良でない食べ物を廉価に供給して呉れたら、非常に便利ではあるまいか」と、翌月の短編作品で別の登場人物に露伴は語らせる<sup>(22)</sup>。こうした連続性は、「御手製未来記」最終回が欠けていたこれまでは、さして明瞭にならなかったことだが、今回の発見を踏まえると、この繋がりがはつきりと浮かび上がり、「供食會社」とはつまり、「人力の整理」という観点から炊事の煩瑣という問題へ答えを出すことを描いた「御手製未来記」の派生作品だったのだということが明らかになる。また、「御手製未来記」連載終了三か月後に発表され、統計や確率を主題にした「人世の萬事を豫知すべき道具」には、研堂の筆とおぼしい前置きがついており、「世界萬般の事象につき、人類の勞力を半減すべき道具を渴望する、幸田博士の獨創的卓説、眞にこれ人世の大整理策。咀嚼再三滋味を覺るを要す」とあり、ここに確認できる「人世の大整理策」という言葉は、「御手製未来記」最終回の「人力の整理」という概念とやはりはつきり接続されている<sup>(23)</sup>。

## おわりに

本稿では、幸田露伴「御手製未来記」の現在知られている本文が、実は最終回を欠いた不完全なものであるという、これまで知られてこなかった事実を原稿・初出双方から確かめ、その欠落した本文を詳細に報告することで、連載当時の「御手製未来記」の「本来の形」を示した。また、この作品で詳細に描写される数多くの商業アイディアの根本となる「実業学」の原理的な部分を「天然力の使用」「人力の整理」と述べ、露伴がこの作品を終えていたことをはじめて明らかにした。さらに、この発見に付随して明らかになった事実として、①露伴は「御手製未来記」を現在知られている形よりも長大なものとして構想していたがこれを断念して「最終回」が書かれたという意味で未完の要素もある作品であること、②「御手製未来記」の本来の構想は、翌一九一二年に書かれた少年向け短編群へと引き継がれたため、それらの諸作品は「御手製未来記」からの派生作品と考えるべきであり、これらを含めたものが露伴の構想から言

えば「御手製未来記」の「本来の形」に最も近いものであることも見えてきた。露伴が少年文学をさかんに書いた時期は、一八八九年から一九一二年までの間であり、本論で問題にした一九一一年の「御手製未来記」と翌一九一二年の短編五作品とは、露伴が書いた少年文学でも最後の時期に書かれたものである。露伴は、それらをきわめて具体的なアイディアの連鎖によって描き出すのみならず、そうしたアイディアを思いつくための基礎的なものの考え方として「人力の整理」「天然力の使用」という実業学なるものの根本も提示して、『実業少年』の年少読者を啓蒙しようとしていた。

## (1) 註

吉田大輔「幸田露伴『御手製未来記』における商業アイディア ―その文化史的・産業史的意味の一端について―」『比較文学』第六十二巻、日本比較文学会、二〇二〇年三月、五一―六五頁。なお、この『比較文学』掲載論文を投稿する直前に本稿で述べる雑誌掲載時の最終回を発見したため、論旨に改めて組み込むのが難しく、別稿を草した方がよいと判断して、こちらの論文では最終回の発見には触れていない。また、その注(1)では、先行研究を踏襲し、全「一〇回」の連載と書く一方で、初出の「連載すべてを実見した」とも書いた。投稿前に古書店から入手した資料も併せて「連載すべてを実見」できたのはその通りなのだが、本稿で明らかにするように「御手製未来記」は新発見の一回を含む十一回の連載であったというのが正しく、ここで訂正したい。加えて、この論文で「番茶會」の読みを「ばんちゃかい」ではなく「晩餐會」へのパロディなのだから「ばんさかい」と読むのが正しく初出のルビはそうなっている、と言いきってしまったが、雑誌初出を細かく見ていくと、「ばんさかい」ではなく「ばんちゃかい」とルビが振られている箇所もあり、また、今回実見することのできた露伴直筆原稿で「番茶會」にルビがある箇所は、主に「ばんちゃかい」とふられていた。おそらく露伴は「ばんちゃかい」と読ませるつもりだった可能性の方が高く、この読み方でも「晩餐會」へのパロディは機能するので、読み方はあまり神経質に考える問題ではなかったかもしれない。そして、本稿で述べる新発見の文章を収めた原稿九冊目になると「番茶會」に露伴は

ルビをふっていない一方で、研堂がつけたのか、同じ文章の雑誌初出のルビは「ばんさくわい」になっている。「ばんちゃかい」が正しい可能性が高いが「ばんさかい」とも読みうる、程度のゆるやかな把握に訂正して、粗忽をお詫びいたします。

(2) 露伴生前、一九二九年から一九三〇年に刊行された第一次『露伴全集』では第五巻に、一九四九年から一九五八年に刊行された第二次『露伴全集』第一刷と、一九七八年から一九八〇年に刊行された第二次『露伴全集』第二刷では第一〇巻に、それぞれ収録されているが、この三通りの全集すべてに、新発見の「最終回」は未収録である。

(3) 具体的には、以下の八冊である。刊行年が古いものから番号を付して示せば、①幸田露伴『立志立功』東亜堂書房、一九一五年、②『現代日本文学全集三十三巻 少年文学集』改造社、一九二八年、③『少年世界文庫第一編 番茶會談』小山書店、一九三六年、④『少年少女のための現代日本文学集第一巻 幸田露伴集』東西文明社、一九五五年、⑤『少年少女日本文学名作全集第十二巻 幸田露伴集』東西五月社、一九六〇年、⑥『SF倶楽部』第六号、SF倶楽部、一九七二年十一月、⑦『日本児童文学大系第四巻 幸田露伴 江見水陰 尾崎紅葉 泉鏡花集』ほるぷ出版、一九七八年、⑧『少年小説体系第八巻 空想科学小説集』三一書房、一九八六年、となる。①から③までが露伴生前の再録であり、④から⑧が没後の再録である。筆者は①から⑧すべてを確認したが、新発見の「最終回」はいずれにも収録されていない。本文に大きな異同はなく、基本的に①の本文をもとに②から⑧の再録は行われたようだ。

(4) 本作へ直接に言及している先行研究・紹介の主要なものは以下だが、そのいずれでも、現在知られている本文が連載時の最終回を欠いていることへの言及はない。こちらも番号を付して示す。①柳田泉『幸田露伴』一九四二年、中央公論社、四一三―四一六頁、②福田清人『幸田露伴の少年文学』『明治文学全集九五 明治少年文学集』筑摩書房、一九七〇年、四三八―四四四頁、③塩谷賛『幸田露伴 中』中公文庫、一九七七年、二四五―二四七頁、④登尾豊『幸田露伴論考』学術出版会、二〇〇六年、二二九―二六〇頁、⑤関谷博『幸田露伴の非戦思想』平凡社、二〇一一年、一六七―一八二頁、⑥横田順彌『近代日本奇想小説史』ビラールプレス、二〇一一

年、六六五―六七六頁、⑦長山靖生『日本SF精神史』河出書房新社、二〇一八年、一〇八―一一〇頁

(5) 出口智之『幸田露伴』『近代文学草稿・原稿研究事典』八木書店、二〇一五年、二〇七―二一〇頁

(6) 一九五二年の第二次『露伴全集』第一刷、第十五巻の巻末には、露伴「神仙道の一先人」(一九一九年)は細川護立所蔵の直筆原稿を参照したことが述べられている(五九三頁)。佐々木氏に伺うと、この原稿は今も永青文庫にあり、『露伴全集』の版元・岩波書店からの手紙も同封されているとのことである(筆者はどちらも未見)。こうしたことから護立が一九四九年から五八年の第二次『露伴全集』第一刷の編集作業に自身の持つ「神仙道の一先人」の原稿を貸して協力したことが伺える。この時期に「御手製未来記」の原稿を持っていたらこれも見せてくれたのではないかという気がする。護立が「御手製未来記」の原稿を入手したのは第二次『露伴全集』第一刷の編集作業より後のことだったという推測もできるが、この点はわからない。また、なぜ露伴の原稿を購入したのかもよくわからないが、念のため記せば護立は学習院で『白樺』の同人であり、露伴を尊敬していたに『幸田露伴』(新甲鳥、一九五〇年)を書く武者小路実篤とは親しい友人だったというような脈絡もあるので、こうした点も原稿の購入に関係しているかもしれない。また、露伴「『名著文庫』解題「保元物語 平治物語」」の原稿も永青文庫は所蔵しているとも佐々木氏に教えていただいた(これも筆者は未見)。のちに述べるように、「御手製未来記」は『実業少年』に全十一回に渡って掲載されたが、原稿としては九回分として書かれ、紙面の都合で掲載が月をまたいだことが二度ある。具体的には、製本原稿四冊目の交通機関の未来を語った一続きの部分が『実業少年』第五巻五号(一九二一年五月)、第五巻七号(同六月)に、製本原稿八冊目の養鶏の未来を語った一続きの部分が『実業少年』第五巻十一号(一九二二年、十月)、第五巻十三号(同十一月)に分載されたようだ。

(7) 山下恒夫『石井研堂 庶民派エンサイクロペディストの小伝』リブポポト、一九八六年、二五五―二五六頁

(8) 『実業少年』の出版史的意義は、前掲山下『石井研堂』、一九三―一九六頁、佐藤洋一「石井研堂編集雑誌『実業少年』の刊行過程について」『福島県立



博物館紀要』一五号、二〇〇〇年、福島県立博物館、一六三―一七〇頁に詳しい。

(10)

『露伴全集』第十卷、岩波書店、一九七八年、六五二頁  
前掲柳田『幸田露伴』、四一四―四一五頁

(11)

浦西和彦「幸田露伴初出目録」『露伴全集』別巻・下、岩波書店、一九八〇年、五三七―五四〇頁

(12)

細かい点だが、前述のように第二次『露伴全集』第二刷、第十巻巻末では、『御手製未来記』の連載は十回で終了したとされ、最後に掲載されたのは「十二月号」であると書かれている。また、その典拠とおぼしい前掲柳田

『幸田露伴』では、「お手製未来記 旨いものを安く食はれる法」(同年十二月号)がこの連載の最後だと述べられている(四一四頁)。これらは、完全な間違いではないが、正確ではない。一九〇八年創刊の『実業少年』は、刊行二年目の一九〇九年から、毎月一冊の通常発行以外に、年に二回の臨時増刊号を加え、一年に十四冊の刊行を行うようになる。「御手製未来記」が連載された一九一一年にも、『実業少年』は十四冊刊行された。このうち、五巻一号(二月号)から五巻五号(五月号)までは、巻号と月号の数字が同じである。しかし、五巻五号とは同時に五巻六号「店員出世鏡」と題した増刊号が出る(五巻六号は、一九一一年刊行『実業少年』のうち、前述の四つの図書館にも所蔵がなく、筆者が確認した限りでは三康図書館にしか所蔵がない)。「御手製未来記」は、増刊の五巻六号には掲載されなかった。ついで五巻七号は「六月」に発行されているが、これ以降「〇月号」という記載が表紙から無くなり、巻号と発行日だけの記載になる。以降、月に一冊ずつ刊行されていき、第五巻十一号(一九一一年十月)第五巻十二号(同年十月増刊号「冒険商人」)の二冊も、共に一〇月に刊行された。柳田は「旨いものを安く食はれる法」という章題をつけた「十二月号」の連載で「御手製未来記」は終わったと言うが、これは「御手製未来記」の第五巻十一号(同年十月)、第五巻十三号(同年十一月)の二回に渡って同じ章題で掲載されたものであり、「十二月号」に載ったわけではない(また、そもそも「〇月号」という記載がない)。その一方で、今回、筆者が発見した本来の最終回は、第五巻十四号(同年十二月)に載ったもので、一九一一年十二月で連載が終わった、という意味では、全集の記述や柳田の記述も完全な間違いではない。ただし、繰り返しになるが、本稿で

報告する最終回はこれまでまったく知られてこなかったものである。

(14)

文学博士幸田露伴「御手製未来記(十) 旨いものを安く食はれる法」『実業少年』第五巻十三号、博文館、一九一一年十一月、三十一―三五頁

(15)

「天然力」という言葉は、たとえば福沢諭吉『実業論』(一八九三年)の中などにも似た意味で登場し、露伴の独自の語彙ではない。福澤は水力発電に触れる文脈で「天然力」という語彙を使っており、福澤や露伴は、今日の自然エネルギーとかなり近い意味で「天然力」という言葉を用いている。福澤諭吉『実業論』福沢諭吉著作集』第六巻、慶応義塾大学出版会、二〇〇三年、三五七頁

(16)

『露伴全集』が不明としてきた「鐵の物語」の初出と改稿は、筆者が以下の報告で明らかにした。吉田大輔「幸田露伴の少年文学『鐵の物語』初出の発見について ―雑誌『実業少年』掲載「人類世界の主催者たる鐵の面白き研究」(署名・鐵隠)―」『京都芸術大学紀要 Genesis』二十四号、京都芸術大学、二〇二〇年九月、一三六―一四二頁

(17)

たとえば、これまで結末部とされていた「御手製未来記」の連載十回目「御手製未来記(十) 旨いものを安く食はれる法」(前掲『実業少年』五巻十三号)は、初再録「立志立功」では一八四―二〇〇頁に対応するが、本来の「最終回」の直前であるこの箇所を修正を見てみよう。句読点の位置や漢字表記の変更も見られるが、特に字句を変えている箇所に限って示す。「細い鐵管を以て縦横に上下に組立て」(初出、三十三頁)が「細い鐵管を以て縦横に上下に格子のやうなものを組立て」(初再録、一九一頁)に、「室の或部分に温泉の細い流を暴露させて置けばそれで済むのです」(初出、三十三頁)が「室の或部分に温泉の細い流を暴露させて置けば、濕氣の供給はそれで済むのです」(初再録、一九一―一九二頁)に、「其の附近の農家で良種の鶏を一家族二家族位飼養するやうにし、」(初出、三十三頁)が「其の附近の農家で、良種の鶏を、大なる一家族だけ位飼養するやうにし、」(初再録、一九三頁)に、「山間で鶏雛を造り、豊穠地で飼養をし、」(初出、三十五頁)が「山間で鶏雛を造り、穀菜の豊穠地で飼養をし、」(初再録、一九八頁)に、「支那では千年前にも既に発見されて居た証據は」(初出、三十五頁)が「支那では千年前にも既に発見されて居た証據は」(初再録、一九八頁)に変更されるなどの修正が加えられている。また、『立志立功』に本来の「最終回」が収録されていた

とすればその直後に置かれることになる「供食會社」にも字句修正は少ない。「供食會社」の雑誌初出と初再録の字句の異同については、本稿と同時に発表する予定の以下の別稿にて触れる。吉田大輔「共同炊事への夢 ― 幸田露伴『供食會社』(一九二二)とチャイルズレストラン、堺利彦、簡易生活 ―」『京都芸術大学紀要 Genesis』二十八号、京都芸術大学、二〇二四年秋刊行予定、頁未定

(18)

どの本をめぐる話なのかは不明ながら、一九二九年に刊行がはじまった第一次『露伴全集』の編集を担当した露伴の弟子・漆山又四郎が、全集準備の過程で、既刊単行本のひとつの誤植の多さについて露伴に尋ねたらしい。露伴は、魚釣りをしていると校正刷りが風に飛ばされてしまったのだと言いい「面倒くさい」から「電報で校正済みとやっちゃった」と言っていたと同じくその場にいた小林勇が書き残している(小林勇『蝸牛庵訪問記』岩波書店、一九五六年、十八頁)。露伴の言葉は冗談かもしれないが、そのまま受けとれば、校正について悪く言えば時にいい加減であり、よく言えばおおかだだったこともあるという証言で、このようなことが『立志立功』の成立時にもあったのではないかという気がする。

(19)

『実業少年』五卷十四号、博文館、一九一一年十二月、一五頁、傍線引用者  
前掲幸田露伴『立志立功』序文

(20)

前掲柳田『幸田露伴』、四一四頁  
幸田露伴『供食會社』『実業少年』六卷一号、博文館、一九一二年一月、二

(21)

一頁、傍線引用者  
幸田露伴『人世の萬事を豫知すべき道具』『実業少年』第六卷三号、博文館、

(22)

一九一二年三月、六頁、傍線引用者

(23)

\*本稿は、科学研究費・若手研究「文学と商工業の結索点としての『実業小説』―『実業少年』と幸田露伴に注目して―」(JSPS・22K13058)の成果の一部であり、助成いただいたことに深く感謝いたします。同時に、調査や図版使用の許可を与えてくださった永青文庫のみなさま、わけでも、露伴直筆原稿の存在を教えてください、調査に際しても多大な便宜を図ってくださった学芸員の佐々木英理子氏に深く感謝いたします。



## The Forgotten Final Segment of Koda Rohan's "Otesei Miraiki": A Re-Examination of His Contributions to *Jitsugyo Shonen* during 1911-1912

YOSHIDA Daisuke

### Summary

From 1889 to 1912, KODA Rohan (幸田露伴, 1867-1947) wrote numerous enlightening prose works for boys. Among these, "Otesei Miraiki" (「御手製未来記」, 1911) stands as a seminal work of juvenile literature and it also evokes the nascent stages of what would later be recognized as science fiction. It was serialized in *Jitsugyo Shonen* (『実業少年』, Hakubunkan, 1908-1912) throughout 1911, and was later included in *Rissbi Rikko* (『立志立功』, Touadou, 1915) under the title "Banchakaidan" (「番茶會談」). However, archival research unveils that the last segment of "Otesei Miraiki" is missing from this book and is also absent from the author's *Complete Works* (Iwanami Shoten, 1978-1980).

The first section of this paper details the final segment of "Otesei Miraiki", reproducing it from Rohan's hand-written manuscript preserved in the Eisei Bunko Library. This manuscript closely matches the version published in *Jitsugyo Shonen* (Volume 5, Issue 14). The remainder of the paper aims to present new insights into how this segment and "Otesei Miraiki" as a whole resonate with other works published in the magazine. In 1912, Rohan wrote five short stories for *Jitsugyo Shonen*, which I argue would originally be conceived as part of "Otesei Miraiki". This study traces the publication history of the work to explore a broader narrative framework and thematic continuity in Rohan's contributions to the magazine during this period.